

# 仏像頭部における鼻梁側面観造形の特徴分析

Feature analysis of nasoglabellar profiles in Buddhist sculpture heads

小林茂樹<sup>1)</sup>、土屋晋<sup>2)</sup>、藤澤隆史<sup>2)</sup>、長田典子<sup>2)</sup>

Shigeki KOBAYASHI<sup>1)</sup>, Shin TSUCHIYA<sup>2)</sup>, Takashi X. FUJISAWA<sup>2)</sup>,  
Noriko NAGATA<sup>2)</sup>

E-mail: kobayashi@keisolabs.com

## 和文要旨

仏像の製作は、1世紀末に現在のインド・パキスタンで発祥した後アジア各地へ伝播し、各地・各時代で多様な造形を展開した。私たちは、この多様な造像様式を計測的かつ統計的に解析している。ここでは鼻梁側面観造形の特徴分析を試みた。国内美術館が収録した中国石窟寺院仏頭と平安期近江の観音菩薩像の側面観写真をデジタル画像として取込み、画像上で計測を行った。計測は、tr\_aよりgn\_aに引いた直線を基準線とし、tr\_aよりprn\_aに引いた直線と基準線がなす鼻尖角に対して、それぞれprn\_aより鼻梁に沿って引いた直線と基準線が成す鼻角、tr\_aよりg\_aに引いた直線と基準線が成す眉間角、およびtr\_aよりse\_aに引いた直線と基準線が成す鼻根角の比の対数変換値を、有効な特徴パラメータとして選定した。また、少数のヒト類似型側面観作例を有効に抽出するために、仏像と人間のデータを併用する多変量解析を行った。人間のデータには学生の横顔画像データを用いた。仏像とヒトの併合群のクラスター分析と主成分分析から、仏像鼻梁側面観造形に「リニア型」、「単調型」、「起伏型」、および「隆起型」の4型を確認した。

キーワード：仏像頭部、鼻梁側面観、特徴パラメータ、クラスター分析、主成分分析  
Keywords : Buddhist sculpture head, Nasoglabellar profile, Feature parameter, Cluster analysis, Principal component analysis

## 1. はじめに

仏像の製作は信仰の形而下表象として、釈迦滅後約500年を経た1世紀末に、現在のインド(マトゥラー) およびパキスタン(ガンダーラ) で発祥したとされる。その後造仏はアジア各地へ伝播し、造形方式と民族性と経典による規範(儀軌)の3要素をないまぜながら、各地・各時代で多様な造形を展開してきた。草創地造形方式の影響は、とくに中国の初期像に見られ、朝鮮半島や日本もその傾向を継承したが、一方東南アジアでは民族性の強い様式が顕著になった[1]。

仏像をめぐる二面性として、つくる側とつくられたものを受容する側を区分することができる。後者は本来仏教信仰者であったが、彫刻としての優品を選んで美術作品と見る観点が欧米あるいは近年の日本で盛んになっている。

私たちの研究の立脚点は、前者すなわち造仏の側面にあり、地域や時代の影響を受けながら、仏陀や菩薩が人間を超越する存在としてどのような造形上の表現をなされてきたかについて、計測的アプローチの可能性を追求している[2],[3],[4],[5],[6]。

## 2. 目的

仏像の特異的造形の一つとして、鼻尖から前額に通じるいわゆる「ギリシア鼻」様造形が知られ、中国石窟寺院から日本まで広い共通性が見られる。一方、日本の造仏様式において画期をなしたとされる運慶作円成寺大日如来のように、短鼻で眉間と鼻根の起伏があり、人間により近い印象を与える作例も登場している。このように鼻梁造形には多様性があるが、経典規範である三十二相

<sup>1)</sup> 形相研究所、Keiso Research Laboratories

<sup>2)</sup> 関西学院大学理工学部、School of Science and Technology, Kwansai Gakuin University